僕の日常は小さなカフェにて

ヨハン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の日常は小さなカフェにて

【Nコード】

N8744Z

【作者名】

ヨハン

【あらすじ】

誰が見ても美少女な少年、幸村^{ゆきむら} 凧^{なぎ}。
彼は根っからの虐められっ子体質であり、その容姿から女子と勘違いした男子に告白される事も多かった。
しかし、彼が男だと知ると多くの人間は彼を虐めの対象にする。

そんな虐められっ子の少年、凧はある日いつものように虐められていた。

それを助けた青年との出会いが、彼の日常を変えていく。

自身のブログやpixivなどに重複して転載してます。
どちらもユーザー名はヨハンです。

お気に入り登録、評価共にありがとうございます！

僕の容姿は災難の元（前書き）

小説の初心者ですが頑張つて書きます。
楽しんでいただけたら幸いです。

僕の容姿は災難の元

「てめえ、よくも!」

「っ……離してよっ!」

地平線の彼方にもうすぐ日が沈みそうな海。細波が打ち付ける暗闇の砂浜。

僕はリーダーらしき恰幅の良い男と、その取り巻きと思われる数人の男達に囲まれ、リーダーらしき男に腕を?まれていた。

「よくも俺様を騙しやがって!」

「勝手に勘違いして告白してきたのはそっちじゃん! 僕は男だ!」

女だと勘違いして僕に告白してきたその男に、僕は勝手に恨まれていた。

あまり珍しい体験ではないのだけれど、やはりこの容姿に生まれた事を後悔する瞬間だった。

「うるせえ! 間違っただよ! 男に興味はねえ! なよなよしやがって! ぶん殴ってやる!」

「はあ?! なんでそうなるのさ!」

男は理不尽極まりない理屈を大声で言い放つ。

僕は反論するが、もう遅かった。男の拳がすぐ目の前に来ていた。

「黙れ!」

「うぐっ！ がっ！」

男の拳が僕の頬を打ち抜く。その度に快音が響いていた。周りの取り巻きと思われる男達もそれに便乗し、殴る蹴るの暴行を繰り返し始める。

激しい痛みが僕を襲う。砂の上に小さくうずくまったので、暴行を受ける度に砂で全身が汚れていく。

「この野郎！ ふざけんなっ！」

「あぐっ！」

乱暴な怒声と僕の悲鳴に誰かが気づいたのだろうか。砂浜を走る足音が聞こえてきた。

僕は薄く目を開け、その足音の方向を見る。

「何してるんだ！ やめるっ！」

「やっべ！ 誰か来たぜ！ 逃げろ！」

少し低くてよく通る声……次の瞬間にはもう、男達はとっさに逃げ出していた。

僕はそのまま砂の上に横たわる。どうせ汚れているからこの際どうでも良い。

……なんて理由は言い訳だ。本当は単純に痛みで立ち上がれないだけだった。

「おい！ しっかりしろ！」

「う……う……」

「おい！ おい！」

声の張本人が僕の上半身を起こす。心配そうな顔がうつすらと目に映った。

その人の呼び掛けに反応しようとするも、僕の意識はゆっくりと闇の中へ落ちていった。

「……ん……」

瞼が重い。そして体がまだ所々痛む。目を覚ましてすぐにそんな感覚に見舞われた。

僕は次に鼻で深い呼吸を試みる。コーヒーの良い匂いがした。

……「コーヒー？」

「おい、大丈夫ー？」

「わっ……っ！」

「わわっ、駄目だよ。まだ安静にしてなきゃ」

近くにあった顔に思わず吃驚して、僕は体を跳ね上がらせた。すぐに体を痛みが襲う。

目の前にいた、美人で優しそうな女性が慌てていた。手にはマグカップを持っている。

その人から目を逸らし、僕は身の回りを見回してみた。僕が寝ていたのはソファだった。他にはテレビやベッド、その他のインテリア。生活の必需品が、丸太作りの山小屋のような部屋の中に置かれていた。

僕は自分の状況がよく理解できなかった。

「こ……ここは何処ですか……？」

僕は恐る恐る、目の前の女性に尋ねてみる。

女性は少しきよんとした表情を浮かべ、その後すぐに笑って答えた。

「あ、私の部屋だよ。私の知り合いがさ、ボロボロの君をここに連れてきたんだよ。最初は驚いたけどさ、放っておけないからここに寝かせてたんだ」

「そう……ですか。ありがとうございます……」

「ははっ、礼なんかいいって」

目の前の女性は気さくな態度だった。笑うとやっぱり美人だ。

その笑顔に僕が少し顔を綻ばせた時、木の階段を駆け上がる音が聞こえた。

「……明日香さん、その子の様子は……って目を覚ましてら……大丈夫か？」

階段から現れたその人は、僕を砂浜で助けてくれた人だった。何かの制服のような格好で、黒いエプロンを着用していた。

「……………」

「ねえねえ。大丈夫？だつてさ」

「え、あ……………はい。大丈夫です……………痛っ」

男の人の服装をぼーっと見てみると、女性に声を掛けられた。僕は
は我に返り慌てて答えた。その時にまた全身が痛んだ。

「まだ痛むのか……………？」

男の人は僕に近づいてきて言った。声が少し低く、なんだか怖そ
うな雰囲気でした。が、どうやら良い人なのかもしれない。顔立ち
からすればまだ20代前半くらいだった。そしてコーヒーの香りが
その男の人からした。

「あのっ……………助けてくれてありがとうございます」

僕は頭を下げる。あんな状況は慣れっこだが、助けて貰ったのは
久しぶりだった。

「……………別に礼はいらん。男が数人で女を虐めるなんてこと……………どん
な理由があるつとあつちやいけねえだろーが……………」

「そうですねか……………って、あの。僕……………男なんですけど」

ぶつきらぼつにそつぽを向く男の人の言葉に相槌を打ちかけて、
僕は訂正する。

また間違えられた、そう思いつつも本当のことを告白する。

すると、しばらく沈黙。女性と男の人が固まっていたような気が

した。

「……………男……………なのか？」

「嘘……………だよな？ だってすっごく可愛いし……………どこからどう見ても女の子じゃ……………？」

「はは……………でも、本当に男です……………から」

その後しばらく、その場の空気が凍り付いていた気がした。

「まあ、君可愛いしどっちでもいいや。ぎゅーっ」

「わわわっ！ 離して下さい！」

どうしてこうなったんだろう。

状況を整理すると、僕が自分は男だと告白した後、男の人は一旦階段を降りて行った。

目の前の女性は男の人が下の階に消えていくのを確認した後に、僕を犬か猫のような扱いで抱きしめている。

僕は抱きしめられている。抜け出そうとするも中々抜けられない。体が痛い。

「っ！……………ふう」

「何で逃げちゃったのー？ 遠慮せずにさ、こっちにおいで？」

何とか抱擁から抜け出す。しかし、女性は両手を広げる。

「……嫌です」

僕の答えに納得がいかないのか、女性がえーっと言う。しかし僕は、少し距離を空けた。

「そこを何とか……私に君の温もりを！」

「嫌ですよ……そんなこと」

なんだかこういうスキンシップは……苦手だ。今は体が痛いし。多分良い人なんだろうけど……ちょっと変わってる人だ。

「お願い」

「嫌です」

「抱きしめさせて？」

「嫌です」

「いいじゃん」

「駄目です」

男の人が戻ってくるまで、僕達はしばらくこのやり取りを繰り返した。

「ほら……これ飲め」

「ありがとうございます……あの、大丈夫ですか？」

「うう……痛いよー、亮の馬鹿ー」

「明日香さんが見ず知らずの子にセクハラ行為をしてるからでしょーが……」

「セクハラじゃないよ、スキンシップだよ」

「相手が嫌がってたからセクハラだっつーの」

「っ！ またチョップしたー！」

あの後、男の人がやってきて背後から女性にチョップをした。そして僕にカフェオレが入ったマグカップを渡してくれた。

女性曰くスキンシップらしいが、男に人にはセクハラだと咎められ、それが原因で二人は喧嘩している。でもなんだか、二人とも楽しそうだった。

「そっいや、君って名前なんていうの？」

急に女性がこちらを向く。

僕はとっさの質問に戸惑いながらも答える。

「あつ、えつと。幸村ゆきむら風です」

「風……やっぱり女の子でしょ？」

「違いますけど……」

「残念……」

「残念って何ですか……はは」

思わず苦笑してしまう。

どうやら、僕が女である可能性をまだ諦めていないらしい。

そう感じていると、本来の話題を思い出したように女性が自己紹介をした。

「あ、私は羽入はにゅう明日香あすかっていうんだ。よろしくね」

「俺は神崎かみさき亮りょうだ」

「羽入さんに……神崎さん……よろしくお願いします」

「下の名前でいいよ、風君」

「……俺も下の名前でいい」

「……明日香さんに……亮さん。ふふっ」

何故か顔が綻んだ。僕は目の前の二人に何ともいえない安心感を感じていた。

「やっぱり可愛いわ……よしよし」

「わっ……」

明日香さんの暖かい手が僕の頭を撫でる。

くすぐったいような感覚が頭から伝わってくる。

なんだか恥ずかしかったけど不思議と嫌な気分がしない。

「ところで、凧の家はどこなんだ？ 今頃親が心配してるんじゃない？」

……

亮さんが尋ねてきた。

僕の親は海外出張中ではない。今は仕送りをして貰って一人で生活していた。

その旨を亮さんに伝える。

すると、隣で話を聞いていた明日香さんが提案してきた。

「じゃあさ。今日はここに泊まっていきなよ。その怪我じゃ家に帰るのも大変でしょ？」

「え……でも……」

「遠慮しないで。どうせ一人暮らしで寂しいしっ」

「そんな……そこまでお世話になるわけには……」

「大丈夫だよ。変な事しないし」

「オイ」

亮さんが怪訝そうにツツコミをいれた。
僕はしばらく黙り込んだ。そして……

「……やっぱり、失礼します！」

そう言っつて僕は駆け出した。凄く身体が痛んだが気にせず階段を駆け下りる。階段の一番下に僕の靴があったので、靴を急いで履いて出入り口らしき場所から出て行く。今まで僕がいた場所はカフェらしき店の2階だったことに気がつく。オシヤレで落ち着いた内装だった。

店の外に出ると、そこが意外にも家の近くであることがわかった。そして、そのカフェがいつもは目に留めず、あまり意識していない店であったことを自覚する。

僕は自宅を目指し、海が見える小さなカフェから少しずつ離れていった。

ふと振り向くと、カフェの入り口付近にはさっきの2人がいた。どうやらこちらを見ているようだった。

僕は急に罪悪感に駆られた。それを振り払うように走り出し、やがてカフェは見えなくなつた。

僕は痛みと格闘しながら、自宅を目指して夜を迎えた町を走っていった。

僕の不安は心の足枷（前書き）

凄く長くなりました……

というわけで2話目になります。

途中5行空いている所は場面の切り替わり……と一応説明しておきますっ（・・）

僕の不安は心の足枷

あれから数日後。

怪我は思ったより大したことはなく、怪我をした日から今日までの数日間ですべて治っていた。

あの日以来、僕は一度もあのカフェに訪れようとはしていない。そもそもあの二人は赤の他人だ。あの時はその場の雰囲気です心安心していたし心を開いていたのかもしれない。でも、実際はどこの誰かも知らない人達だ。もう自分には関係ない。

そんな考えを持ち始めていた。

明日も明後日も、普通に高校に通って普通に日常を送る。虐められることも隣り合わせの生活を送る、きつと。

二度とあの人達と関わる事もない。

結局……一人でいるのが一番性に合っている。

「……………」

今日はよく晴れた日だった。太陽の光が燦々と海に降り注ぎ、水面がきらきらと光を反射させていた。

僕は砂浜に腰を下ろし、一人で海を眺めていた。静かな波の音が響いき、僕の耳に届く。

ぽかぽかとした暖かい陽気の中で、僕は瞼が重くなる。日差しが気持ちよい。

次の瞬間、聞きたくない怒声によって僕の中の睡魔が消えた。

「幸村アアアア！」

「わっ！」

振り向くとこの間の恰幅のいい男がいた。嫌な予感がする。

「この間は邪魔が入ったが今日はそうはいかねえ！　って待ちやがれ！」

「っ！　嫌だ！」

男が台詞を言い切る前に僕は走って逃げ出していた。呼吸をする事も忘れそうになるほど、必死で走っていた。しかし、足場は砂浜なので走りにくい。それに、僕の元々の足の遅さも加わる。男との距離が縮む一方だった。

「ハアっ……ハアっ……」

息が切れる。体力の限界だった。

僕はその場に膝を着いてしまった。汗が頬を伝う。

振り向き尻餅をつく、後ろから刻一刻と男が近づいてくる。

思えば……どうして僕は逃げていたんだろう。この間だって自分の足の遅さも力の弱さも、嫌というほど自覚しているのに。どうせ、今までもこれからも虐められっ子なのに。どうして。

「……何してんだ？」

「あ……亮さん……」

あの日、僕を助けてくれた恩人である神崎亮かみさきりょうさんがいた。僕と男の間を遮る様に割って入る。

「な、なんだてめえ！」

「俺か？ 俺はこの子の知り合いだ……それがどうした」

この前はあまり気にしなかったが亮さんはかなりの長身だ。亮さんの後姿が凄く頼もしく目に映る。

男はそんな亮さんに少し怖気づくが、ポーカーフェイスを装って強がるような態度を見せる。

「邪魔すんじゃない！ 俺はそいつに恨みがあんだよ！」

「……で、それが虐める理由になんのか」

「あ、ああそうだ！ だから……そこをどけ！ お前には関係ねえだろ！」

亮さんは凄い血相で怒鳴る相手にまったく動じない。

「関係ある。知り合いが危険な目に遭ってるのに放っておくわけねえ」

「……！！」

たった一度顔を合わせただけ。そんな関係なのにどうしてそこまでしてくれるのか、今の僕にはわからなかった。

「ま、どうしてもってんなら……俺が代わりに殴られてやる」

「は、はあ？！ 何言ってるんだ！ 頭おかしいんじゃないのか？！」

亮さんの発言に、ますます疑問が膨張する。

僕自身の問題であり、亮さんが殴られる義理はない。（だからと

「いつて僕が殴られるのも理不尽極まりないが」

「そう思うならそれでもいいが……とりあえずこの子には指一本触れんな。もし触れたら……色々と保障出来ねえぞ」

亮さんの声のトーンが明らかに下がった。

後ろからで分からなかったが、男の動揺が顔に出る。どうやら物凄い殺気を秘めた目で睨んでいるらしい。

「ひっ……殺される！」

男が一目散に逃げ出す。「殺される」って、どれだけ凄い睨み方をしたのかわからない。

亮さんは尻餅をついたままの僕に手を差し伸べる。

「……立てるか」

その言葉を聞いた瞬間、僕の中の何かが切れた。そして、かなりの量の涙が頬を伝う。鼻をすすり袖で顔を拭うがあまり意味が無い。亮さんが心配そうに声をかけてくれた。

「ど、どうした……どこか痛むのか……」

「いえ……っ……なんでもないっ……です」

その後僕が泣き止むまで、亮さんは傍にいてくれた。

泣き止んだ後、僕は追われる前のように海を眺めていた。隣には亮さんが腰を下ろしている。

「……落ち着いたか」

「はい……その、すみませんでした」

「なんで謝るんだ」

助けてもらったのに、何故か泣き出してしまつて迷惑をかけてしまったと思つた。

しかし、亮さんはあまり気にしていないようだった。

「……あの」

「？」

「どうして……僕を助けてくれたんでしょ……？ あんなに……必死に守ってくれるんでしょ……？」

恐る恐る聞いてみる。

どうして自分のためにここまでしてくれるのか全く分からなかった。しばらくして亮さんは立ち上がり、僕の横を通り過ぎて行った。

「……………さあな」

小さくそう言って、亮さんは僕から離れていった。少し離れた頃、亮さんは急に振り返つた。

「明日香さんが、凧に会いたがって………気が向いたらでいい」

気が向いたら顔を出してくれということなのだろうか。

それだけを言い残して、亮さんは去っていった。

細波の音が砂浜に響く中、僕はただその場に立ち尽くしていた。

僕は少し緊張しながらカフェの出入り口であるドアを開ける。この前は逃げるようにして帰ってきてしまったから少し気まづかった。ドアの上部に取り付けられていた鈴がなる。すると、その音に誘われるように店の奥から明日香さんが顔を出した。店の制服姿。その上から黒いエプロンを着用している。

彼女のすぐ後ろには亮さんがいた。何も言わず、軽く手を挙げて挨拶してくれた。

「あのっ………うわっ！」

「凧君だああ！ 久しぶりいいい！」

亮さんの挨拶に反応した僕は明日香さんを見た。そして、目が合ったと思ったら一瞬で距離を詰められ、強く抱擁される。

突然の事に一瞬思考が停止した。体が硬直する。しかし、すぐに恥ずかしさに見舞われた。僕は必死に抜け出そうと抵抗した。

「離して下さい！ 明日香さん！！！」

「嫌よ！ 今日離さないからね！！」

ぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっ。そんな擬音語がこれほど似合う状況はきつと少ない。

「ちよっ……苦し……いです」

僕が苦しさのあまり気を失いそうになった時だった。店の奥から鈴の音のような声が聞こえてくる。

「あら、明日香さん。その子が前に言ってた可愛い男の子ですか？」

声の主と思われる、気品が溢れる女性が店の奥から出てきた。

綺麗な黒髪でカチューシャをしていた。服装は明日香さんと同じく店の制服、そして黒いエプロン。身長はおそらく僕よりも高い。彼女は明日香さんに抱擁されている僕の頭に手を置いて言った。

「ふふ、明日香さんは大胆ですけどね、本当はとてもいい人なんですよ。だから仲良くしてあげてくださいね」

丁寧な口調に、心が洗われるような天真爛漫の笑顔。その笑顔に向けられた瞬間、僕は息を呑んだ。

「は、はっ……」

思わず答えてしまう。その答えを聞くと、女性は嬉しそうに明日香さんに言っ。

「だそうですよ。明日香さんっ」

あんな笑顔を向けられて断れる人はそうそういないだろう。
女性は僕に見せた笑顔を明日香さんにも向ける。

「ホントに？」

それを聞いた明日香さんが僕に向けた物凄く輝いている眼差し。
相当嬉しいらしい。

「……………」

僕はまたも硬直してしまふ。頬が赤く染まっているのが自分でも
分かった。

明日香さんの顔が見る見る内に綻んでいく。

「か…………可愛すぎ……………」

「凄く…………苦しいです」

さつきよりも強い抱擁。この抱擁から抜け出すという発想が、き
つと意味を成さないくらいに。

「明日香さん、そこら辺でそろそろ離してやった方が……………」

亮さんが助け舟を出してくれた。

明日香さんは亮さんの言葉に対し即答した。

「やだ」

助け舟はすぐに沈没した。

きつとしばらくこのままだろう、僕は直感した。
その直感は見事に的中し、しばらく離してもらえなかった。

「それで、今日はどうしてここに？」

店内のカウンター席に座らされた僕に、明日香さんが尋ねる。
亮さんと、笑顔を素敵な女性は明日香さんの両隣にいる。

「え……と、助けてもらったお礼を言いに来たのと……明日香さんが会いたがってたって、亮さんが言ってたからです」

僕は正直に答えた。当初は本来の目的であつたこの答えを危うく忘れそうになっていたが。

その答えを聞くと、亮さんは静かに微笑んだ。笑顔の素敵な女性もクスツと笑う。明日香さんは……

「あの……明日香……さん？」

「んー？」

「これは一体……」

いつの間にか僕の背後にいた。そして後ろからまた抱擁される。この状況にだんだん慣れてきてしまっている自分が少し怖い。後者の理由……言わなくてもよかつたかな。

「相当気に入られたな、凧」

亮さんが言った。何だか亮さんが少し楽しんでそうな気がしたの

は、僕の気のせいだと信じたい。

「そういや、凧は何かアルバイトしてたりするの？」

亮さんのいきなりの質問。

「え？ 特に何も……」

「そうか……」

「？」

僕は何が何だかよくわからなかった。亮さんがどうしてこんな質問をしたのか。

亮さんは一呼吸おいた後、僕に提案する。その提案を聞き、なんとなく質問の意図が分かった。

「……よかつたらここで働いてみないか？」

「えっ……？」

唐突な提案に僕は驚いた。

亮さんは僕の様子を見て付け加えた。

「もしよければただどな。このカフェ、俺らを含め四人しか従業員
がないんだ。それに……」

「それに……？」

亮さんの途切れた言葉を僕が繰り返す。

「何だか、凧ともっと関わってみたくなっただんでな」

「……………」

その言葉にまたも驚く。だが、驚くと同時に嬉しさもあった。

亮さんは、驚きと嬉しさの入り混じった僕の顔を見て口元を緩ませた。

心が揺らぐ僕への追撃と言わんばかりに、後ろから抱き着いている明日香さんが言った。

「ナイスアイデアだね！ 凧君がいればきっと楽しくなるよ！ 私からもお願い！」

「明日香さん……………」

僕は少し後ろを向いて呟いた。

ここまで人をお願いされることは今まで無かった。必要としても与えることも無かった。

僕の心は確実に、このカフェで働くということに向き始めていた。しかし、本当に自分でいいのだろうか。僕は心の中で葛藤し始める。

僕は震える声で呟いた。

「本当に……………僕なんかでいいんでしょうか……………」

呟いた後、場が沈黙する。

僕の思い込みだろうか、明日香さんの僕を抱きしめる腕の力が強まった気がした。

「今までだって僕と関わろうとしてくれた人はいました……でもっ……皆離れていきました。虐められっ子の僕と関わると……皆ろくな目に合わないって……」

僕は震えた声で続ける。

「怖い……んです……誰かと関わって、見捨てられるのが……離れていってしまうのが……」

「凧君……」

明日香さんの腕の力が更に強まる。

「だから……その……」

「そんなモン、こごじゃ関係ねえよ」

「え……？」

亮さんが僕の言葉を遮るように言った。
それに続けて明日香さんも言った。

「私達が関わりたくて関わってるんだから……心配しないで」

さっきまでの口調とは違い、穏やかで優しい口調だった。
優しい抱擁、明日香さんの体温が背中から伝わる。

「私も……最初は凧さんと同じような考えでしたけれど……今ではこのカフェが大好きで仕方ありません」

女性に再び、あの素敵な笑顔を向けられた。
この人もこのカフェで働くまで何かあったんだろうか。
三人の言葉が頭の中で何度も繰り返し響く。

「……よろしく……お願いします……」

言葉を考えるよりも先に言い出していた。それが僕の本音であり、
願いだっただのかもしれない。

静かに言葉を言い終えると、明日香さんが真っ先に嬉しそうな反
応してくれた。

「よろしくね！ 凧君！」

「……はい！」

向けられた無垢な笑顔に、僕は力強く答えた。

「とりあえず、改めて自己紹介しようか」

明日香さんの提案で自己紹介をするらしい。

少しでも早く親睦を深めようとする明日香さんなりの考えなのだ
ろうか。

「私はこのカフェ『さざなみ』の店長、羽入明日香ねっ。年齢は…
…25。ちなみにこの店の2階が私の家なの。結構広いわりに一人
暮らしだから寂しくてさ……だからいつでも遊びに来ていいからね

っ?」

結構長めの自己紹介だった。

この前の部屋は明日香さんの部屋だったのか、と少し関心する。そして、年齢の部分で凄く声が小さくなっていたことが気になったがきつと気にしてはいけないのだろう。

次に亮さんが喋り出した。

「神崎亮。22歳だ。漢字で苗字を書くと『かんざき』と間違われることが多いが『かみさき』な。ここでは厨房担当で料理長だ。ちなみに俺以外にもう一人厨房担当がいる。まあ……どんな奴かはすぐ分かるさ」

苗字の件は少し気にしてるみたいだ。

自己紹介の後半で、亮さんは腕時計をちらりと見ていた。すぐに分かるというのは、すぐに会えるということなのかな。

「私は立明寺彩乃たけあき さいのと申します。年齢はちょうど20歳です。凧さんと同じように、亮さんにお誘い頂いてこのカフェで働き始めました。私以外の方は皆さん忙しいと思うので、わからないことがあったら私に聞いてくださいね」

また素敵な笑顔を向けられた。相変わらず心が洗われるような天真爛漫の笑顔だ。

彩乃さんの口調はまるでお嬢様のようで、とても丁寧で優しい。

「ささ、次は凧君の番だよ」

明日香さんに催促され、僕も自己紹介をする。

「僕は幸村凧といいます。一応、17歳の高校生です。今は海外出張している両親に仕送りをしてもらいながら一人暮らししてます。迷惑を掛けることも多いと思いますけど……よろしくお願いします！」

「よろしくね！ 凧君！」

「よろしくな」

「よろしくお願いしますね」

三人の反応に僕は笑顔で答えた。
その時、店のドアが開き鈴が鳴った。

「こんにちは……ってあれ？ 皆でどうしたの？」

現れたのは亮さんが言っていたもう一人の厨房担当の人だった。
明日香さんが僕の肩を抱いて言った。

「可愛いでしょ？ 新たな仲間だよ」

「へえ……」

「ゆ、幸村凧っていいいます。よろしくお願いします」

僕はお辞儀をした。すると……

「明日香さんに相当気に入られて、大変な日々になるかもしれないねえ……ふふつ。俺は井上冬夜フユキって言うんだ。そこにいる神崎亮と

同世代だよ。よろしくねー」

何故だろう。背筋が凍るような気がした。

それ以前に、この人の目を見ていると全てを見透かされているようだった。

「ふうん……何だか、君とは仲良くなれそうな気がするな。観察力が鋭そうだし、僕の前であんまり情報を漏らしていけないと思ってるみたいだからね」

爽やかな笑顔。だけど何故か……黒い。

「あー、こいつは腹黒のDSだからな、気をつけるよ」

亮さんが言った。なんていうかそんな気がします、と心の中で共感する。

「えー、そうかなー？ 俺ってそんなに腹黒い？」

「「うん」」

「何だか、少し不思議ですよね」

亮さんと明日香さんのストレートな返答が見事に八モる。
彩乃さんは言葉を選んだようだった。

「ははっ、まあいいや。よろしくね、凧君」

「は、はい」

でも、このカフェでの、この面々との出会いはきっと……

「運命……かな……」

「何か言った？ 凧君？」

「いえ、何も……」

今はまだ小さな疑問だけど、いつか本当にそうだと思えばいいな。

僕の不安は心の足枷（後書き）

長かった……けど書いてると楽しいです。

推敲は何度もするようになってますが

それでも誤字などがあるかもしれません……

その他ご指摘などがあればお願いします。感想もお待ちしております。
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8744z/>

僕の日常は小さなカフェにて

2011年12月29日02時06分発行